

シャンフロ二次

エーゲ海のええ外科医

思い付いたら更新する。

# 目次

|             |    |
|-------------|----|
| エムル耳搔き      | 1  |
| ポツキーの日SS    | 7  |
| サミーちゃんいいよね… | 13 |
| ばれんたいん      | 17 |



## エムル耳掻き

エムルが耳かきする。

---

「サンラクサン！」

やっとテスト終わった……と久しぶりにシャンフロにログインするとエムルが声を掛けてきた。

「おう、エムルか。どうした？」

「サンラクサン、なんだかお疲れですわ？」

「あー、まあちょっとな」

今回のテスト範囲ヤバかったからな……。

てか流石シャンフロ。こんなちょっとした疲れも見抜くとは。

「そーんなサンラクサンにアタシが耳掻きしてあげますわ！」

「ええ…俺水晶層崖行こうと……」

いや待てよ……？ もしやこれ0氏が受けた『ディアレの秘密特訓』みたいなユニークシナリオなのでは？ なら……

「よっしゃ、頼んだぞエムル」

「はいですわ！」

………

………

………

「あのーエムルさん？」

「どうしたんですわ？」

「なんで膝枕してるんですかねえ……」

「こうしないと耳搔き出来ないですわ」

それはそうなんだが……まさか人形態だとは。確かにいつもの姿だとエムルが俺に乗って耳搔きすることになるからな。それにしても膝枕……膝、ひざ、ピザ。う、頭が……。

うっかりトラウマを思い出していると、エムルが耳に顔を近づけてきた。

「今はマナポーションが無くて数分しか出来ないけど、がんばって気持ち良くしてあげるですわ」

いつもの騒がしい声とは真逆の囁くような優しく落ち着いた声に一瞬息が止まる。

「それじゃあ入れますわ」

エムルが俺の耳に耳搔き棒を入れる。

思ったより優しい手つきだな…もっとガシガシ削って来るのかと。

「痛くないですわ？」

「ああ。思ったより優しくて驚いてる位」

「それどーいう意味ですわ!？」

「褒めてんだよ、大声出すな」

「な、なら良かったですわ…？」

上手く丸め込まれたエムルが耳搔きを続ける。

それにしても……

「なんで耳搔きしようと思ったんだ？」

「ほえ？」

「いや、急に耳搔きするとか言い出したからな。なんでだろうってな」

「……サンラクサンはいつつも休む暇無いくらい突っ走っちゃうから、たまには息抜きして欲しかったんですわ……」

息抜き<sup>クッゲー</sup>はしてるはずなんだけどな……まあ、エムルなりの氣遣いってことか……。

「ありがとな」

「ぴょえっ!?　べ、別に感謝して欲しくてやったんじゃないですわ!　ま、まあ、その気持ちにはありがたく受け取っておくですわ……」

それから少し経ち。

「サンラクサン、なんかうとうとしてますわ？」

……眠い。想像以上に気持ち良くてちょいちょい意識が飛びそうになる……。

「寝ても良いんですわ。さっきも言ったけど、たまにはお友達の家に行かないでお

休みすることも大事ですわ。だから……」

エムルが顔を近づけ、耳にふーっと息を吹き込む。

「今日は、お休みなさいですわ、サンラクサン」

ぼやけた視界に微笑を浮かべたエムルが映る。

その光景を最後に俺の瞼と意識は落ちていった……。

評価、感想宜しく願います。

別のも書くかも。



## ポッキーの日 SS

ポッキーの日記念(昨日)

---

永遠楽

「らくくーん、こっち向いてー?」

「んー?」

スマホに向けていた顔を隣に向けると我が彼女殿……天音永遠の姿が。その手にはチョコを纏ったスティック菓子……要するにポッキーが用意されている。

「はい、あーん」

突然のことに戸惑いながらも素直に食べる……うまい。

「なぜポッキー? バレンタインはまだ先だぞ」

「はあ……これだからクソゲーマーは。ポッキーの日ぐらい知らないの?」

「あつたなそんなの。生憎とゲームの期間限定イベントになるくらい有名じゃない

と興味が出ないんだなこれが」

永遠は半ば呆れた目をしながらこちらを見ている。と思ったらまたもやポッキーを俺の口に振じ込んで来た。そのまま食べようとして異変に気付く。

永遠が俺の食べてるポッキーの端を咥えている、俗に言うポッキーゲームだ。

このままだとヤバイ……だが逃げればからかわれることは必至！ どうすれば……いや、ここはあえて、

サクサクサク…

進む！

永遠が驚きで一瞬目を見開く。予想外だったようだ。俺が逃げると計算していたんだろうが甘い！ このまま進んで逃げた所をからかってやるわ！

サクサクサク…

あのー永遠さん？　なんで逃げないの？　もうそろそろ唇が触れ

「楽くん顔赤いよー？」

……勝てねえ。

紅楽

「楽郎さん！」

「おう紅音か、どうした？」

「今日はポッキーの日らしいですよ！　なのでポッキーどうぞ！」  
ずい、と渡されたポッキーをサクサク食べていく。

「楽郎さん！」

「ん？」

「私にもください！　あー！」

えーとつまり？……食べさせろってことか。

なんだろうな……紅音の赤い口の中が見えてドキドキしてしまう。　つと、気を取り直して。

「ほい、あーん」

「っ、さくさく……」

「ッ……」

くっ……ハムスターみたいに食べてるところにドキッとしてしまった。

お、食べ終わったか。

「ごくんっ、もつとください！」

「はいはい」

袋からもう一本取り出し食べさせる。サクサクサク……

「くださいっ！」

サクサクサク……

「くださいっ！」

サクサクサク……

「くださ「自分で取れ！」でもでもっ！楽郎さんに食べさせて貰った方が美味しいんですよー！」

むっ……。

ヒョイ

パクッ

サクサクサク…

「えへへー」

ちくしょう…可愛い…

.....

おまけ サンディップ？

「今日はポッキーの日だよねえ…」

「そうだな」

「そんなわけでサンラクくんのポッキーをぼっく「帰る」冗談だよお…！」

付き合ってられるか、まったく……。。

\_\_\_\_\_

文才が、ねえ！

評価、感想ください（ガチ）



サミーちゃんさんいいよね…

近所のペットショップにて。

「ペット飼うって、どうしていきなり？」

「楽郎くんは私が居ないとずっとゲームしてますよね」

「そりゃもちろん」

玲の言葉に楽郎は頷く。ゲームが生きがいの楽郎は、玲と二人きりの時間以外はほぼ全てゲームに注ぎ込んでいる。

そんな環境で玲がいなければ延々とゲームにのめり込むだろう。

「あ、ダメと言うわけじゃないですよ？ もともとゲームしてる楽郎くんを見て好きになったんですし……」

「…玲さん、見られてるから」

「ひょえっ!? す、すいませんっ！」

周りの人から生暖かい視線を向けられ赤くなる二人。

「て、そうではなくっ！ 楽郎くん前に言ってたじゃないですか、さばがん？」

というゲームのプレイヤーが病院に搬送されたって」

「あー、言った気がする」

ゲームを終えた後痛そうな素振りを見せる楽郎に、玲が何のゲームかと聞いたことをきっかけに鯖癌の話をしたのだ。

「その人みたいになられたら、私ショックで死んじゃいますよ！」

「さすがにならない……とは言いきれない」

「ので、ペットちゃんの面倒を見るために、途中でゲームを止めざるをえなくなれば、楽郎くんは倒れず私も安心できるという寸法です。できれば叩き起こしてくれるくらいのしっかき者がいいですね」

（うーん、理論的には合ってるのになんかズレてるような……まあいいか）

勢いに流された楽郎はお世話お世話になるする相手を探し始めた。

「って言うてもなあ……あ」

虫や魚以外の知識が無く悩んでいた楽郎の視界に一匹の白蛇が映り込んだ。

そいつが入ったケースへ無意識に手を伸ばす楽郎。すると向こう側から白蛇が頭

を擦り付けてきた。

「っ……」

「楽郎、くん」

その様子を見た玲が駆け寄ってくる。

「ああ、玲さん。どうしたの？」

「どうして、泣いているんですか？」

「あ？ あれ？　なんで、あんな昔の事……割り切った、筈、なのに……」

ポロポロと涙を溢す楽郎に、玲は何も言えなかった。

「泣き止みましたか？」

「その、ご迷惑を……」

「いいんです。それより、この白蛇さんで良いんですか？」

玲がケースに入った白蛇を指差す。

「うん、こいつがいい。久しぶり……なのかな」

「♪」

「心なしか白蛇さんも喜んでそうですね。それで、名前は どうします？」

「名前……アレでいいかな？」

「……………」

玲の目には、楽郎の言葉に白蛇が無言で肯定したように映った。

「な、なんでそんなに通じ合ってるんですかあ……」

「俺にもよく分かんないけど……」

「運命、かな」

ちよつと格好つけすぎたな、と苦笑する楽郎。それと同時に、白蛇の赤い舌がチロリと見えた。

---

評価・感想宜しく願います。

## ばれんたいん

新大陸にひっそりと佇むカフェ……『蛇の青林檎』。その一角でサイナ、ウィンプ、エムルによる『じょしかい』が開かれていた。

「で、わたしたちはなんであつめられたのかしら」

「サンラクサンには聞かせられないお話ってなんなんですか？」

「…ごく飲茶、返いい質問ですね答こた時に二人とも、バレンタインというものをご存知ですか？」  
紅茶を啜るサイナの質問に二人は首を傾げる。

「そのバレンタインってなんなんですか？」

「解答：開拓者の間で話題になっているイベントの名称、女性から普段お世話になっている相手や好きな人物へ菓子類を贈るという内容だそうです」

「ふーん……つまりあいつにおかしおくろうってこんたんなわけね」

「肯定せやな：まあどちらかと言えば当機ワタシがお世話してあげてる側ですがね」

「それでお菓子って何を贈ればいいんですわ？」

「チョコレート、という物を贈るのが一般的そうですね」

「そのちょこれーと？　はどこでうってるのよ」

サイナはウィンプの言葉に呆れたように首を振る。

「嘆息……ウィンプ、貴方には呆れてインテリジェンスも言えません」

「べつにいわなくていいわよ…」

「手作りってことですか？」

「Exacely」

とまあだいたいこんな感じのやり取りを経て、三人はサンラクへ贈るためのチョコレートを作り始めた……訂正、たった今四人に増えたようだ。

「何、してる？」

「ぴやつ!?　てい、ていーあすしえんしえ…」

「バレンタインで契約者<sup>マスター</sup>へ贈るお菓子作りを」

「(サバイバルが言<sup>ゆ</sup>ってたやつ……)ん、私も手伝<sup>わたし てつだ</sup>う。何<sup>なに</sup>したらいい？」

「それでは……これを混ぜて貰えますか」

「ん、わかった」

エプロンに着替え、言われた通りに作業するティーアス。そしてそれを遠目で見る不審者達。着せ替え隊。

「ティーアスちゃんがチョコ作りを……！」

「エプロン姿も可愛い……」

「ツチノコさんッ……！　なんて羨ましい……！」

「サバさんが知ったらどんな顔するかなあ……」

「てかティーアスちゃんいつもより楽しそうじゃね？」

「……………この話は止めよう」

「『『そうしよう』』」

……………

## 数時間後

なるほどなるほど、だいたいの流れは理解した。

いや自分の為にチョコ作ってくれたのは素直に嬉しい、これは本音だ。

だがそれはそれとして少し考えてみて欲しい、明らかに見た目がおかしいチョコを食えと言われているいと頷く派は少ないと思うんだ。

「で、なんだこれ」

「ちょこれーとよ！」

「四品中三品が見た目おかしいですけど」

先ずこのどす黒いビターチョコよりビターっぽいチョコを作ったのは……

「サイナ、どうしてこうなった」

「逡巡……チョコレートを溶かそうと思いヤシロバードから借り受けた火炎放射器

を使用、しました……」

「今日からお前はエセインテリジェンスだ」

「なん……だと……  
絶句」

次！ このチョコバナナならぬチョコ人参を作ったのは……

「エムル、なんだこれは」

「うらビッツ産一等級スイーツ人参のチョコレート掛けですわ！」

「せめて人参は切って欲しかったな、せめて」

エムルはまだマシか、そしてこの白い皿が……

「ティーアス幼女先生」

「……何<sup>なに</sup>」

「えっと……何も無いのは何故なのでしょう……」

そう、この皿には何も乗ってない。透明なチョコだったならまだ良かったが正銘~~々~~無~~々~~なのだ。

「作<sup>つく</sup>ってたら……お腹<sup>なか</sup>すいたから」

うん、じゃあしょうがない！

いやだって……師匠ポジにあんまり強く言えないし……。

気を取り直して最後！ ウィンプ！

「どうよ！」

「そっか料理する奴だったなお前」

ちゃんとチョコレートしてやがる……！ 前三つがアレだったからより輝いて

見えるぞ。

よく考えれば唯一の料理担当だからまあ納得。味も……

「どうなのよ」

「うん、うまい」

「ふふん！」

おーイキってるイキってる。まあちゃんと美味かったのでよしとしよう。

「よーし解散！」

「待機を推奨」  
おいコラちよつと待て

「どうし…た」

俺を呼び止めるサイナ&エムル&幼女<sup>ティーアス</sup>先生。

俺はウインプのチョコだけ食べた。

彼女らが手に持つは試食もされなかったチョコ(?)達。

「成る程？」

レベントリガー ハザード  
古雷の撃鉄・災起動！ 最速で店を出「早さじゃ負けない」あっ……

結果から言うとはエムルのは意外と食えた。サイナのは食べたらしりっプダメー  
ジ食らった。攻撃アイテムとして有能だった。

でも皿食わせるのは止めてくれませんかねえ!?

記念二次

計画してから

書き出そう

エーゲ海

## シャンフロ二次

---

著者 エーゲ海のええ外科医

発行日 2023 年 9 月 6 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/298415/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---